



小治田之真清水卷之二 部勢田

勒使殿 黎田の紀事 千秋家の事 老樹の奇事 八月八日國事 楊貴妃の古事 神宫御文庫 頼朝如奉納圖

素盖馬尊社

同夏木五の圖

田島家の事

龍神社同龍王

楠御前の事

八級宮の異事 寐覚里 西行法師故事 當麻五即完跡 源大夫神社事 神宫寺井奇事 尾張濱主舞圖 不實梅古木事

赤本陣の圖

鳥居演

路と不食事

六角堂の圖

白魚

輔鱼

海瀬前濱来事同生捕古園

三浦神葭祭圖 幡屋の名義 白鳥山陵 琉球人以墓

辛螺栄螺子 夏越枝圖 悪七兵衛宅趾 同堀出古器圖 七里渡海 PD

## 本武尊并宫酢媛御歌

王盖以献彼媛所著

紀十一世年富非

那字信那志母夜和何祁勢流意須比乃字問你阿佐都紀乃其止久都止志斗止志以佐介美古麻和何多介都紀加佐孙岐美麻如何多介字夜須美志志和期意高岐美多伽比加流比乃美古阿良多麻乃岐門由宮縣城奉和曰 小 祁流 宇間小阿佐都紀乃其止久都紀如佐孙岐美麻知何多小宇倍以乃美古阿民多麻乃岐間由久

縁起にらり古事紀に載きたい 小同 大異頗古祖語艺

右寬平熱田

田 之

黎田の紀事 六國史とてかろちくの史類諸家乃記録令式の書及 乃臨時祭式に九尾張國勢田社每年春秋二節節别屈僧六十四口轉讀 水の汲ってく残まは物多うはと拾りて爰にとは以其うち延喜 詩文集物語よる軍書雜録に至じまて當御社の事實でもあしたは物 事残ったくは行う也後樂人の禄ちゃすってつっとかくの事なり すくれっとい大概名所圖會にもあし置けれと循小治田ろいもちれ らりたの明神のとうとうんうあいろいれにたからは云云とええを音 うこういの巻に二月うは山階寺のがこん會にありせはよりはけの 金剛般若經一千卷其布施供養以神封物充之人之内一栄華物語乃 らりて二月涅槃會の翌日法華會とり小事始了~~~去了一其外 マー故其のうりりやろりゃん教田の明神壽廣に示現一後事 物語集に山階寺の善殊僧正乃第子壽廣和尚八七中尾張國乃書生政

太鼓乱声同五日夜振鸣如大鈴梅異也 張國言上正一位勢田大神自今月一日三箇日并十二日安時社中鳴 日本紀晷乃八神祗宝典に康保三年两寅三月廿二日丁亥軒而湖上尾 というと釋教のむがに混しまるい尽くするきてされてのせん 元亨釋書とてから僧徒の史録としに勢田の事蹟とものせる甚多し

尾張乃勢田の大宮司、頼朝の為らは母方の祖父也をいうて此太刀 此日來養りれ奉信を前世八事まってもりの今八一向親方と想む也 きん事うと心憂られいうんして、可隠と思いらく庄司に語て云く 終にろうられなん身をたいすて果とも源氏重代の飲と平家に取ら に頼朝少なれ共賢き人なるべれい熟案しけれ、我隱居て在 了一小東近江草野庄司と云者に扶られ御座一天井に隠居すり! 級巻乃義朝朝臣横死の事といいお条に兵衛佐頼朝い山口に被棄た と持て下、可被申様、頼朝いとうしの所に深く思いてい

司に此由と申られい即實殿に納めてと 然八数田乃社に進りせ置てたび山、中宣へ八庄司尾張に下り大宮 は進は一きに非す総い頼朝こそ被殺しし此太刀失くし

護云云 兵範記に仁安四年二月十日宣旨社寺炎上猶驚思名石清水賀茂下上 云云尾張國勢田云云栖霞寺法輪寺各慎其灾致祈請宜令社司堂衆守

紫綾盖一盖如銅鈴平文野劔一腰趴在漆赤漆御弓一張前四筋平文鲜 幣一棒各新五匹綿一匹 度會守佐云云東海道伊勢國多度尾張國勢田云云已上世八所被奉 糸東記に寬仁元年十月二日被立太神寶使云云神宝支配事伊勢 一本身死五寸鏡一面編析立平文蘇補一口平文線柱一本云云被奉御

為外戚祖神殊被致中心之崇敬云建久四年十二月一日甲午相摸守 吾妻鏡仁建久元年十月廿七日戊申御潔齋令奉幣熱田社給當社依

1-1





行七座恭山府君祭云云世四日重為御祈於所處本官食轉讀大般若経 月一日葵未熟田社奉幣大官司範經被奉龍蹄御敏等引進御馬云云 壬午著尾張國萱津宿給當國守護人野三刑部並成網進華事云云七 賴朝卿御上洛の條に六月廿五日成寅将軍家関東御下向云云廿九日 黎田社神馬御級等被献之為廣元朝臣奉行各立使者云云建久六年 宫司範經是殊可有御祈禱事也 建久五年九月廿八日七卯大神宫并 惟義為奉幣御使命向尾張國勢田社被献神馬黑栗又被遣别禄於大 露有勢田社御奉幣軍の時かり 軍家御上洛関東御下向乃条に十月十七日戊午霽萱津十八日已未 田社出羽左衛門尉云云同一くようせり誤って重出すっちょう一書複四年将 可修御神樂之由被仰下被付雜掌人仍面人遣使依可動仕之也云云勢 の時は事なり軍天福元年十二月廿日為即不例御祈於御所南庭被乃叛条八賴朝将軍天福元年十二月廿日為即不例御祈於御所南庭被

百鍊抄に建保四年八月十九日被行軒廊御上是依尾張國勢田社御户

不開并燒之之間事也

増鏡のらすらいの巻 えてる 長講堂領費田社なりと御所分がしてらいし 由すりのかく 堂領又すりはの國とくりは数田の社などと神をうへいりかちと 小當代の神むとのずちょくいうべききはの神れまでちりると長講 皇は神からのに引うけくてこれらしく世の人とということは ろ御日敷も程から 過冷しい世の中、新院っくてれる に大宮院御られるうせるて御かけき遊いり 條にいうれにうれてきずどにくととはり月日まれ、故院 文水九年後塞我院如一是了也於心神初七日

尊東と平けなり、時夷野に火とうけて尊と焼殺うん 大きなりかけるの木焼て倒きるのからに田の中れ水熱くなのもの 春の深山路の弘安三年十一月十八日の条にちつくの官八昔日本武 しらりがけると云かり其時天のする切の飲るそ草とかなてろ

うれたりしっい其めと対ちたのはくきとりに其けるぎと此神社に 棒葉記に延文二年二月十八日上皇院光八伏見八離宮に選御する 合せけはようややもはちのいろうう うてもり「ろいうこううたまではっちいる」へろ文永のですめ ~~ 長講堂領法金剛院領熱田社領同别當納云云等、後深草院 開素うてまりしまくの法皇光明院もせんちり教派とら歌選御かる いてくらくけれをいちてやき神しておりしまれれ地夏の頂宮の内に 以來正統にはとことはようれい法皇院嚴乃御少つをとうけて上皇光 ついうとうくらりりはらしてといこ國の少をして後ろはちい りてぬく本意なら事也ともはい ーみ殿/すりしてらび光蔵院殿の御とき文のまとなりけれしり 御官領なりと支は一まに後小松院前神のち熟田社領いぬ くなりもできついはいまでの火多く四五十七うり いっこうれんとわっいいらこう

にりて納りるもちせん 長禄二年前将軍源義政熱田社正殿五神乃神衣心調進一唐櫃五合 熱田舊記應水二十九年前将軍源義持熱田社に御劔神馬と献い

五十哉とついけるはい春からに此應永の百韻いとれるる古ち せー事と知心一一搞忠實乃就に允連歌、筑波集新统波集等の如 田社法樂百韻連歌乃古巻物神学のうちにいの又其のち延徳四年 應水三十年十一月十三日社務滿範祝師仲稍等三十五人附合了人势 通達の宗正多うないとく不思議かる事時の あいらくならしき古巻也といり尊神連歌と好きをは、事 化前夕附与と二三句は了れたる,多く宗祗法師了り以前に百前 百韻天文十六年百韻等数卷的の其項了多當御社了不連歌の流行 いちしたは人官司家ともしき社職の人、今に至はまて連歌に

信長公秀吉公當御社一祈願奉幣献物等乃的了事其項乃軍書

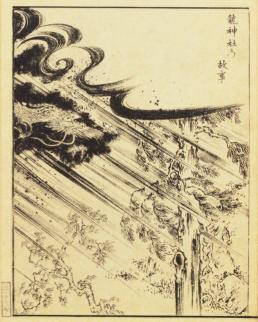
及ひ御湯殿ろう一の日記まにえてしると名所圖會にろせ置しれい

でし、失念致い也ともはなり にろり今に肥後殿建立の門と所の者共中也其年月、何の頃うて有 青申然らい西の門大破了一小と申上のようり則馬場左京と云神 らい造管有度とうりんい社家の者承で御いる一の程有ること 宣人い當國い我生國の事なれい當社にわりて大破に及いそろ所的 續撰清正記に清正熟田大明神一泰詣ソー大宮司神主としい出し 主に銀子せ費目渡一置下國有なら左京奉行了一程なく造営出来

同年関東御待至元禄七年每年以熟同七年十月一日開東被献御太 封内之神愈宗之邦君代、春諸馬元禄五年奉御撫物於朝家後是每 松平君山著書に 東照神君時、請當社尊崇異于他 敬公受封後以 刀一口備前利光とえる

中に押籍置少れ八五夏三月八間雨降ら以世零旱點寸其時弘法大 備りかせる「り太平記、神泉苑事いつら係り西寺の守敬僧都弘法 では~をは一度覧草の龍神社の条ると昔弘法大師神泉が と湛へ北天竺無熱池の善女龍王と勧請~法と修せ~ い三日雨 師り初して祈雨乃法と行きむらはすれてる大内の前に池と堀で水 大師の法力にまけ其根とひくりんとてとろくの龍神で水統 形と作り塩上に立て法で行るといる法成就のとち彼芽の龍王大龍 ありて國出うのか」り其池則神泉苑也极大師茅と云草 うて龍る ~粉の重衆と共に空に昇 東ヤンーて飛去尾張國熱田の宮に留 御本社乃北東にある祭神吉備武彦命い故いりて龍神の神徳





底漏守敏盛中弘法定服視之因請降而善女竜王曰我小身矧无相助者 共影力注大雨其后弘法命善女居神泉湖也茅竜自是居尾張國真清田 乎故私法咒之為大身又睛以茅草作竜形咒為真意於此善女與茅章相 田視三千 尿始知龍在重唯无熱池諸喜女童王以二 寸八分小竜在水藻 請兩部不及我死三千世男諸龍皆置盡中依死力不得出也弘法又入定 差我天皇御守藏大旱命東寺弘法大師,祈雨而驗時守敏和尚居西寺恨 此事即雲日件録了行文安四丁如五月十八日城已座頭話神泉苑事云 畢て龍王八東で差て飛去で其時此社の内へ入後人云云とものは うて雨と祈られらの時天生いのくだ池の善女龍王と請せられ にする舊跡やでしる聞きれい此熱田は社地よりしままし も替的意からけるで只熟田と真清田とのからうつり今中島即一宮 院亦有真清田之額盖弘法特請此神也と行りて太平記乃全文と少 官森中弘法任其所欲真清田乃一宫也弘法曾於此官行秘法也故神泉 行法

勢田宮にはって一て晴と祈で珍今武野安齊仰と奉りて祝詞で作い 十年の夏霖雨久一くやゆうりりれい 國祖賢君六月十六日御使以 我思へとうらい名の有一つと計でして其效験にて事、寛永 記一置きれと此勢田乃龍神八祈雨止雨まけ去験八殊更いち~ おき ,太平記~日件 绿 も僧徒り作なれい佛教 意っておや

使天大神乃廣前不幣帛水奉利珍膳予備天御飯波器物少盛足点神 陳置縣大神乃御心乎平久聞食止称辞竟五恐美恐美手白久 乃臭津源東邊津源葉在至淌天種種乃物子如山小積重林 酒污感腹心淌雙治野仁生留甘菜辛菜山仁生的木實草實青海原 奉留今兹葵酉年六月十六日國司從二位權大納言源君侍臣等乎 尾張國爱智郡勢田仁坐須大神乃廣前七字津乃幣帛子捧乃林辞党 初与利霖雨頻下利河水養溢天水田物陸田物己不所損傷都都人

姓散此樂美聞國安久穩在護利給待止祝部等乎志天林辞竟奉久 作物法五穀物产始五畦圃不生留草乃庄葉小至万天豊小成幸而行 留掛其畏意大神乃灵暴亦依天連而沒晴礼洪水沒治利國中乃民乃 民災害上遭信利因是斯日沙撰天宇都乃幣帛遠令捧持大称辞竟奉

此向一の止雨で待らせ後りし、八成に神風かき起で忽雨やみ空晴 大患地でいてより、源明賢君聞りと一早速奉幣の御使で数田官に 三卯年の秋大雨もなりに降けてき庄内川の洪水危難らるい人共 奉幣終了一八忽去快晴に及り一个多每年六月十六日龍神社一神 所蔵ノ十余通い補住状ろうちに左の状一通り きる 當社中むうしは頃い龍壽社といろしたらしるの千秋家 当万民務生のれりいとなっとは一御冥加普請記とく一板本に又 饌供乃祭祀、此時から始。けてかし 君山著書にもうちいまく天明



右於私宜職者所被付開圖也仍有限御神事等任先例 可致其沙汰之由候也仍執達如件 建武元年九月日 下龍壽社私宜職事 開圖所

楠御前乃事 此楠樹い勢田社四至九町の中央乃標也といいは傳説 きは社りて其補住状数通大宮司家にいり其うちの一通でようになく うしまるせんによく合して連武の以前らり開園林真重のつうけと 166~松平君山八り類聚神祗本源に九大社乃境地九町四方に 究給 楠木御前孙宜職事

之由雖申之無指支證上者任建武二年九月廿五日季氏 右 於宜職者為真重重代相傳當知行之處祖師管領

守先例無懈怠可致其沙法者也 補任其以先代之支證分明間所被宛補也仍於御神事等 文和二年十二月十二日

老樹乃奇事 楊貴妃八古事 あ春いちかく 芽をといか ゆいくりゃす。て中いうつろのら 前一海蔵門東版梅樹也松中世枯槁而失了方信。合也考了一 山著書に延久元年三月七九日記口有靈木三株一两方屋前衫一楠却 往古らら数田乃三度木と称し うち八一株の此時うセ果し也君 田明神是也此社後有五輪墙婆銘釈迦種子故字此端婆楊貴妃墳墓也 溪嵐拾茶集五和二年六月山門に蓮茶官者勢田社是也楊貴妃者今勢 - 正保二、西六月一夜のうちに火出て焼がりとちゃちれ 大宫司 常陸介 藤原朝臣 正事記に勢田乃森に大木らり其うるり枯木れてくに 名所圖會にろせ置した残ってひろいてうにもうい

車などと事えくてむりいらろり物を京皇帝の飛車にろ 飛車しとは一竹取物語うは日物語からとひてやちろいっなと 士楊貴妃の具魂に尋逢い松唐國に帰る命りて皇帝に奏問いる的事 すでい五百年のむうでな俗説至て抽なりいての曽我物語に方 此說至拙哉然至这世彼增婆残社後是依浮屠之就所建也と去了 でて尾張に来られてと了事 うりに俗談って小牧山乃古名と飛車 部仁飛車 無名花注云奇版國人右臂故名之能作飛車從風飛行故曰 叔此飛車といれいうから物っ知るとけれて和名類聚物の車の うてだ渡らせないからとられと例の俗説と信いてかきたる物む 國におまく了ら八敏大明神というれるようとい、数田の明神 いり方士のやまのかしとて皇帝飛車とソー車にろそ我朝見張八 信しうてうはきなれいまれて客は 山とソびーよしていにけた要田に附倉日 俗説ありといくとった

明皇貴妃私語圖

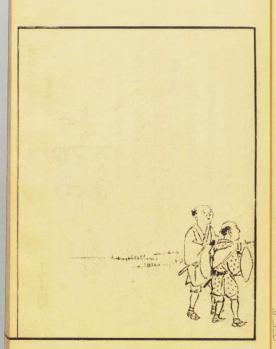
横川和尚季僧

不實梅古木力事 其舊樹、紅梅りて木の模様も今のした甚たり、り正事記になるい 松ちの年ですら、出は是と松うして皮らり此ずらし、よ梅の花咲 大事當社の南門と入って右の方に高、五尺餘足乃梅木での木枝とも 八梅八八重られないの花さく云云でえる世記雑話に、換田八神木 とうれども實いのとは是奇代の木ちりともはなり今の木い花も白 く木皮も松の如くろうびとはるいちしば古老は人ろうちゃしにむり 熱田官東大神扉山鬼相逢埋王妃楊柳是絲花是錦岭如環子繁羅衣電部子紀行 醉侍君王夜未終長生殿上月朦朧在天比翼狼處語墓草秋荒日本東埔奏約京 えて樹いみきし枝も赤松の如く普通け梅らは少しっこうをたや 開林作熟田宫絕与用楊妃故事予亦次其前林 道春 しては木いとく枯まて今のい植づきの若樹なら

き事なりいや 社一奉幣使春向乃日齋部氏も同道してとして敬と致すべき等なる 奉幣之日可同致敬而久代例如不脩其礼的造一也と之色岁的八當御 旋之年留在尾張国熱田社外賊偷逃不能出境神物灵驗以此可觀然則 むうしろ動使参向の式のり、味器になるとかいっていくろう と久代嗣如きはいらやすりのいとり也といへ心也する十年命年の 古拾遺八同二年二月十三仁草雜柳数者心是天至自日本武尊情

に覚い葉いことくな様まるて松葉いるうになるう

神宮御文庫鎮皇門外馬場町にいりむし八神庫八何も八地にいる 奏一善美七尽七日和漢文學嗜好乃諸士農家尚工集會丁七者四十餘 司季雄朝臣再典乃儀と催一年頃力と尽して再営成就の功と遂けた 了去。嘉,永五子年七月六日社家八草御文庫開題翌七夕詩歌管绘 人とくりてりかに雅花なるとな性古の久庫の印章と集古十種 う定うなるの見いりの頃顔感せしるや今八知でうろし近年大宮





にろせつちゃくの如し

教田文庫 印

## 文师命

素盞烏尊社 八門戸ると張りて接災の守りとはは古書がり後世がやまりて是か において、殊に尊崇の此尊う、起きりうち、故に尊の画像と人家 尊許武尊東征之後蔵諸尾張國勢田神祠事見日本紀国哉尾陽民人粘 致矣乎 答曰古人皆云素蓋鳥尊而是非鍾馗也夫草雜級昔在素盖鳥 陽勢田民家每戶粘鐘馗風像本朝皇奉珠城神蓋蘇家雞却爱野養者所 鍾道の像也と思了の實儀と失了りとう了~ 櫻陰腐談に客間回尾 海蔵門の外東西に二祠がを小社なりといしとと當地

巨ノ十三

素尊像矣とえてうり 宝永の写本のの張州志器に引用したる文で参打して

赞田民舍粘素尊像而謂之鎮越矣因賦一绝以正之云

士は裾に至りのい一時其處の山徒山野に将るして遊る也多くと申 熱田御社乃御尊林と崇の奉の日本武尊東夷却征代の御時駿河國富 中及名府うでを家、門柱る私なりむ此事大り小心得ぬりり是い 田旗屋町金毘羅堂延命院同町常行堂等うり方はてくなり園で画に 此画像と日本武尊也とり、異説とらりて賜の草笠無材料るは告熱 少れら尊帯できては處の天叢雲級と枝き草と難てたすうりちい られい尊出て遊いらうに山徒か野る火を放ちて焼殺し奉らんと 八束髮分十複飲斬蛇寸寸素尊威本朝宣奉與邦思英道鎮爐船户在再班紀行 一礼を配は是八鐘道大臣乃像了て思魔拂かるようととくを要田町 山等開齊

千秋家ろ事 尾張氏の人、代、御社乃奉祀とけっちどう~事い名 事といい廻り只初徳と得了む事とのかいうくらしをとうしなれ けからな後、いれと出せは者共追と其もでい不知してよりもない 故るらりて其時の神像と画が一と家て火鎮の守りる粘とう粉 所圖會とえばべー 李範朝臣藤原氏に改姓らて一ろちれ事とサー 何の由縁かりてる数田りの鐘馗の像と配きは事らんやとえるう

嚴島熱田富士之三所也云云 即雲日件録の寛正六年と百六月十八日八条に日本所謂三大宮司盖

申八摄家は御女也上稿と八三家等の大臣乃女也中稿と八名家まへ 海人藻养に内裏に武士乃女と被名仕了位费田大宫司高上杉の女 ら中的に被召仕其外八下的女房に被召任云云女房次第大上的。

女也下稿女房~付諸大夫或八北面の女也

濃國土政多民庄依舊好異他也する、弘長元年九月二日の条に辨法印 妻鏡に建久四年九月七一日御外舅憲當法眼子去著助大夫仲経赐義 り、夏吾妻鏡及い大官司系譜うええ又大喜大官司伯書守宗範の時 祐範志一厚く柳配流でかれ一時人ではけて伊豆國士で送っしなっと 萬野大宮司範経の頼朝卿にきる~~事頼朝卿の母堂は舎弟 左にきるい 審範入滅のうしちはすい等に高名の人、甚多くそーうころれ 間一人主上了的湖邊建同十二月世六日御迁宫以了一七為一其外吾 正應四年二月二日新年祭の夜半大神官乃内院より出火国録宗範奏 これと省き只をは成権勇烈もけ世にはくれてるを五六華抄出して

派以其ける東安け項熱田大宮司に補以是則大江大宮司忠成實父

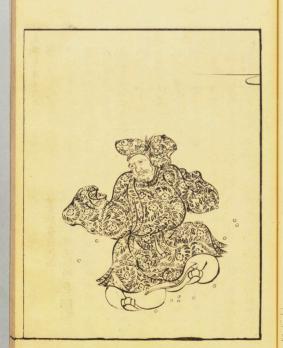
白川院乃北面に候一諸大夫たると、應保年中故がるそ周防國に配 内面頭從四位上範忠 季龍の長男うて母源行遠の女なろう

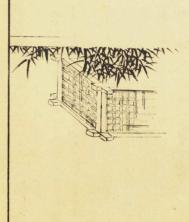
無ろ母うて左馬頭義式は祖母のより藤原公定の分形不譜に足する 氏等乃元祖なり又能忠乃女子能忠の養女ならい、八足利武藏守我 依之了一林以下 教大官司龙京亮也廣 舊司大官司朝季野田大官司朝大夫大江廣元等 to 15 師教田大官司内匠頭範忠子任覺法印附法とりり是も歌田出生の人 ら誠に奇遇とノイー 仁和寺諸院家記に皆明寺任職律師 号越後律 鎮倉將軍の外祖父と足利将軍の外達祖父も共に此大官司家ちまし

としの後白川院の上北面なるし、具夢の告によりて大宮司に補 九即大宫司範雅 田の大宮司是と生捕て京都へ上せりれい則六条河原りて首を被例 人い如何して通きすらなん尾張國一落て母うりちりは雨で教 摄津時親昌 太平記の正慶二年北條高時城七の条に三浦介入道一 伯者大官司李維根津大官司親昌等の元祖のう一分於不譜にている 範忠の弟りて頼朝卿得意の能経大官司の父よう

三八十五

醫坂へ推寄て失一、とし 不射板連て責たらけら云云十二月十一日箱 陳に着たりりち、矢切の合戦に不合事と無念に思て打寄いると体 五日矢矧鹭坂副の条に發田摄津大宮司後き馳うて三千余騎義真の 熱田に着りれ、後陣八まご相坂の関四宮河原に支しり云云十一月世 了他家の大名は八千葉不負胤熟田掃津大宮司是等で宗徒の兵と そのい敵の御方と問ろしも勢田の大宮司百騎計りして待奉は其 を例の十六騎の黨毗泰丁の又北ちは山に添て三八葉柏の旗のえる 引て下移人其勢僅百騎うは過さらろり且へ馬と和一て後と又珍し 根的下合戰捌手了軍破犯不官軍敗北一引退人条に義真箱根山を 南諸國の大名三百二十余人其势都合六万七千余騎先陣己に尾張の 右衛門位義助末ての源氏三十餘人其勢都合七千余騎大将の前後に方四 宣旨と下一孩で同日午利に都と五孩人先當家の一族うは金弟脇屋 ける建武二年の条に十一月八日新田左兵衛督義負朝臣朝敵追罰乃





尾張連演主

**苯住吉內記画** 

勢と并て野七里に专出給小云云延元二年追與勢跡道へ合戦の各に 司入道源雄五百余騎了て馳付本文のうち給事と着きい。云云 とこけ 奥州の國司顕家卿以下正月八日鎮倉と立て夜と日について上洛し せら官軍に忠勤して武功らる事うくのかし 後八八其势都合五十万騎前陣己に尾張の数田に着りれ八根津大宮

藤原昌能 分瓜至譜に親昌以兄大宫司家範以二男昌能大宫司南 奉仕的者多了了了公云武家八華了付新田左中将義自云云熱田大 上三種の神器と先ようて龍鶴を見りられるは此度い武家ると供 被侯とえる太平記の先元二年聖主又臨幸山門の条に五月十九日主 多敏に降人と思者、有及了~K就中世の危と見て好命と軽之官 到遠に前掛成ふりり云云万蔵と早ーなんとい旧夢の輩其功と拾 今路越了ぞ落行路与的云云延元三年先帝前御の条に八月十六日の 官司昌能等と宗徒の侍と一其勢都合六万余騎鳳華の前後に方田て

軍を数力仍に先上野に新田左兵衛佐義兵云云尾張に勢田大宮司云 云皆義心金石乃如らして一度、愛との者共也と立はちり其義忠 新田氏楠氏等にたとかずる一事とからべ

乃祖也ときばせら 紀伊守季通 厚覧草附録に加賀守従五位上李國朝臣男子七く ~~下部無邦の三男をいて嗣~は是紀伊守李通了~~を今八大官司

七二日齋藤道三、指籍は美濃の稲葉山の城攻の夜千秋紀伊守戦死 紀伊丹李光 織田家に属してとむく軍功ら天文十六年九月

義元智多郡に攻寄せ信長公と對陣り時季忠先鋒に進る竟に戦死以 加賀守李忠号并秋智多郡羽豆寄仁在城以水禄三年五月十八日今川

右二人武勇拔羣軍功的了一事其頃の軍書数十部及八大宫司不譜

17

かにきはして世の人のらく知は所なれい軽くこれと暑い

西行法師乃故事 正事記に昔園位法師らつきに下はしく要田に泰請

うくなうなみはまるといいろころはものりん

そは人出むくして とけんかにつ、そうしこ見べりない何方らりの来でんともきんき やらはけらのはつかにといっていまりとろうできる

跡からうつてえば逃去しよしもあせりたいりか里をの就にりて改むる というけんい法師驚た是い定めて大明神の神答したは 二十五姓でしてけてけてけてはしに訴むれ、出船入船泊船帆 了唱歌に歸命項礼西行が始めて東に下はとく数田の宮にまるでは 西行乃發田と逃出了り一个人俗說往、人口に巧り児童等。寒念佛と はい桑名松オホウナンじゅうとうして又二十五姓橋に

一二ノ十八

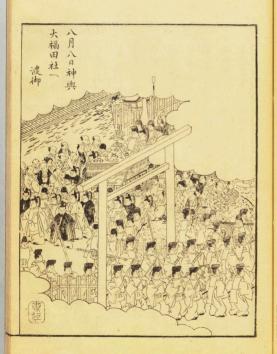
そこそれて社守の私軍になめられんといくては此出したなど截き うりーかり本文王事記に、「お神法師の事政トランな寒念佛の唱歌に、く 等合しな大りの中で女人地よりからた出れたから人、評議して人的よるで表記といるとして、持選いらけれ程から放表の間に言いる、引居(第一、何者の所為かないなかしてうる。存んに指移のき其傍に西行法師御際の行石とぶるから離けより其石三四人でて ちららよっ 考まこして不思議

宮寺井中の奇事 うたて去中であるの大きでとして黒た鳥羽きて出終に井らり羽う ととはちりん怪力乱神と語らうは、儒家の一癖なりされている天地 八事からればに医王院へ院主其後寂とりいうかはぬうちの ち上りて空に翔り行来なく飛行侍りぬえてく一二なりている布有 へ待しに井戸堀の男水で汲みけくして後去と堀りいい砂銭にうい 塩尾に去度寅生永七年熱田神宮寺け阿伽井と後

乃廣大なな神明の不測から怪事なだ変いともは此地ととう、蓬莱 の果既にして奇談玩説すくからかば依て此一冊にいかいは奇事を 後提け戻ーけるころ ちる一新著間原の取行を言に延宝二年户過天 と龍宮うりほうう熱田に住りは歌うていの男のは夜演逸の事るそ と你以夏甚多一猶又曾吕里物語是百年以前 とい俗書に声うたりけ 事主の留主すて手代とう借さらう~ い其手代二人大なな神野 少り极白鳥の大山屋仁左門と、人者二祭。幕と借人と頼、りんしゃ 王の御該数田に流き寄りなれら其所うてみら一躍りと八事で修り 一曲うたいりはに海上にれてらしけない大男一人頭りれ其声の美い 乃旨と守り神佛混一う をくちより近頃白島に住"けば久米其とり、日蓮宗の信者宗門 と家っとうとはかない奇談多しといいと美事ないのかる うれとかめのものやって其歌ううしか海中に引き小暫そして死骸 そ觸機の輝かり 心得天保十年十二月

よい尋常ないにこれる依て公議むつう~く踏織したの土と城。 中九日文病死一其葬棺を送はらて一、島居のうちと通行以其与は 島居と建替させたしてもく「宗門に申むがらくる神祗とのれど 神とり捨となりー、情むべき事なんな ちり以是らる又称事といい一世にそくいちた大島居の忽ち稿木 い僧に來り一本住寺の第子悦山等数人罪科に行いれ神追放の身と では今と恐れて信罪軽う~は~て置、年九月十一日久米其及心迎

田島家乃事 鎌倉時代とり世への将軍に属一軍戦のみと事として餘の服的の事 十六ヶ村の一ちの遺趾なうべし代、椎官司の顕織しら大官司家い とるととしの八郡のうち祖馬丹波なやいへる地八當家の旧領二 田島、後世の苗字からというと、其假名甚かる本国智多郡田島庄 白色い松本与た里なれいるるといる。まととから 本姓、尾張宿称と称すの事、名所圖會にいつけ、如





事かっ知らへし 後事動神事とえているうて往古ら祝部の司とは神戸の多うりし 昌泰三年庚申夏四月云云遣官督於尾別數田使祝部神户百姓永免公 た乃 細に織六尾と貢すし、今いりと以塩魚と集めて送はとうやるる や林一小炉二百五十尾と田島家へ今、貢以又波瀬の内よりいうけび 師家四馬へ貢与一会、米を以て納む又大細とおろび毎にする物語の 塩尻に我黎田三ヶ浦東路といか近世に至けまて板魚と称ー鯛と祝 てこうのり名に當神社の古記古文書小多くい田島の家に傳いまる 布から一故慶長の頃まで神宮の奉祀、専ら田島権官司けるちとん とちあったと専祭事を動り事を知ららし又本朝通鑑提要に

乃職に居り二男利仲の子仲近八惣檢技馬場家の嗣子とう彼職と 祭祀奉了男子二人巧了嫡子田島肥後守仲安、家督了人祝部祭主 尾張宿孙仲和 後柏原院乃御守明應九年了大永三年了七七年

ラノニナー

次公の思い人か辰乃方也女禄四年秀次公自殺が辰の方しますりれ 射重勝入道松雲神雲ス少雲のむすめと仲定の妻とに其妹八則関白秀 丹波守仲定、肥後守仲安の子ちり愛智郡星寄の城主山口半左衛門 けばらし塩んにもはちち 十六村通計三百五十三貫に地と減し 僅の地とりへて其威とれく と聞珍い我領分に隠一置事奇怪也と仲定とうくろて田島の家領二 一つい松雲此田島に来、仲定の許に隠まて居っる太問秀吉公ころ 塩んにんです

八敏宫乃異事 天保十年 女正月十九日の晚八敏宫に妖僧狼藉の異事的 威妻感れもしまして聖朝本殿に選らせたり神殿の鎖一蔵重に且 するで選し奉り今の妖僧八僅一里計り東すで御動座な一奉りしか神 ちょうし他のは借い人知宮とれし奉まるされと道行い神敏と遠路 ~く往古の新羅乃法師道行のうはよいにサートたう事

らくされ以客記して神みの木代してとうにらぎねいさら古趣で少 宿直乃社人の守り念ったくん人の窺い入をたやうちたといっちは 頭髪の近いて俗味にんべりなってり佛者徳住が徒の有髪の男也とういいり びとでうり世に披露なた客事なれと日本書紀の先殿にろうてもい のいりきは妖僧が始末等神秘の恐といりて妻しく記す夏らくい く著しののかえん人委一を言いさいとなむは事けるよく、城僧に会 そうくつうましかはうでとく一不思議なは事じも也其時

源大夫神東海道は旅人と守りない事 級の老とている六七百年以前 乃古書及い中古以来日吉社神道秘密記雅州府志等に至はすて数十 旅人の守護神とし申ちいる、祭神小上与命八尾張乃國造して當 奉的事と他國にい知的人希ちの叔又源大夫の該曲に東海道の旅人 部の實録に源大夫社とろみまるして御本号の上知我麻神社と申 と守ら人と誓いる」りとうろとく三四百年のむうしょの東海道

ニュニナー

大明神一指一末社之人一种一週り腰了了矢立乃硯と好た出しとれ 語の業記とにストーハ子西國行脚と心さし當秋成長七長月上旬乃頂 國本主の御神ちれ、國うら通行の旅人も守り珍くちは、一巡礼物 源大夫の神、東海道乃旅人と守らんと誓ひるようや連縁なる かい武州江戸で五出漸尾州發田に同十七日には死一宿以翌日當所 おれたとと事海及のよい人ともうちりたのれたちんい

いからばと鉄やまして着きいはお来るまとうと、場のようのはしつ一族のようなというないはいのはいのはい

我田山出民

王海集造和

ま一中向の内勢田にて

七里乃渡海并四日市松 物語の数田乃条に九月十八日舟に乗は海中了て 名所画館にしれるはとりし しく増補は 三浦净心 处礼

日市場別に舟着岸に出とのでり慶長いむっくり四日市一渡海 梅南や伊智高きして切れの波はなうてのららはをはる





ろろうー事と知らきて

秦名舟中 殿有時之作

羅山詩集 舟行七里餘到處憶三問枯華暖、偽浮韻深、魚水平開玉鐵雲經於

衣福日暮岸猶遠我生似釣漁

夜松度桑名

· 通知等 春 扁舟来衛即收落一夜桑名七里風天色相連波色上人声猶唱格声中寬拿記行 衆星門、如此燭知月微、似挽弓漸到尾陽眼忽覚盯者朝日早生東 吾湯市污潰濃真砂濃数數小拾不言葉濃五波尽势之 藤朝雲蒙 に者至りろし、後少くはちゃんはのけはしはる 炬範法師

森覺里 久正二年正月二日順作した心脏名所連歌訪問人名所下了がより百前 こうくけんで古人多くいからみのはくろ邊の名所しに宗祗法師 名所圖會に記一置けの如人尾張の名所の美濃の名所か一定 えはこうちにっまれてはらいが ころ 我友好 がは代一女

日本川十日

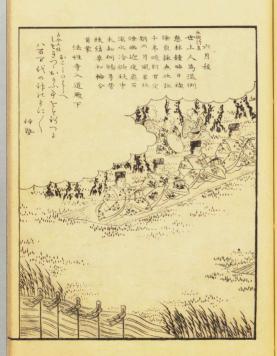
死成以ろうちに

雪海うとれりこんはろるに夜に

私見ろ里や日をさいして

田御殿乃西楼、桑名播と名つく東樓、瑞龍賢君寝覚の床とうけ 覚の里とりかは此過から今八其名と知ば人なりときで一塩見に歌 と尾張の名所ではしけらけたの写覧草の東御殿の事といいは條にな 御歌ととらけたら 也沒了り是則私党の里乃着地方的事と思るらくを珍いような

琉球人の墓断夫山にろり寛延元辰年の冬琉球國中山王の使具志 臣平田氏送り帰り正月十一日熟田宿本陣に止宿也——,使賛官渡 川皇子以下九十余人来聘江户に泰上以翌二己の春歸国薩州矣の長 け干すら沖は中ではちたくておういをいるなね





嘉數親雲上と以官人煩いて終に病死以同僚等悲傷限りな 墓ちら其外諸国にゅうといいともれて書いたとといい者十一月二日旅宿うて病死した合と葬り 見寺から、宝水七年中山王の使りく来朝一き台美里王子乃家来燕中四航帝一大来朝一八月二十四日其地与大病等的多少年的一時也又連江濱東の東王五年中山王八使女家主成和古人人でたち一頭五子尚家の诸墓がが、後十五年中山王八使女家主成和古人小人であり、如城珠人の墓、所くに多一般河の清見寺に具志 山に送て奔めて石碑と建て置し、百年のむり いていてんすべなる布晒女町海國寺りて葬れて営み北山乃三味斯 でちって今八其

當麻五即真稔。完趾 鳥居濱 大宮司李範をの兄三河五即李頼のむすの由良御と申と養女と 左馬頭義朝に嫁一進らせ一女四男と生以姉姐八一條中納言能保即 滯留大宫司一門即等就清田南條懸申送云云とえるてる 一日右兵衛佐配流伊豆園廿三日賴朝着教田島居濱遠江太郎許二日 乃北方其次八右兵衛佐賴朝其次八宮內亞義門其次八土佐冠者希義 演乃島居の邊というはなる。一伊豆日記に永暦元年三月十 其地定うちりに塩ん及い青栗園随筆に数田乃

範頼の母八遠江國池田宿遊女とえて是とたっくりといてとしま實母 に潜きて成長らて一故蒲の短者と称るしらしとはどう分野不譜に 亟季成八大官司季範の弟なれ、其由縁として彼國に下り季成、許 住居と成りうと遠江國蒲生御厨の福祭領蒲生八幡の神主勘解由 平治の乱に義朝我をいたなりうは朝敬の妻子なれいとく熱田の また範頼~共に故郷勢田に下り當麻五即自稔、許に在られらる。 しい蒲冠者範頼なら範頼い尾張乃逢左小林もよそ誕生にかくて京 電の無郷が大夫の社の近きかとりにすかたろし人ならし 六月宇治橋の合戦に千電四郎同新太郎戦友のうしちってけいは千 又天野人物志に千電四即重範 藝田の人とえる吾妻鏡に美久三年 まは頼朝柳と同母のらしつくらり被田まてい申傳ししかん いやした接着ならり急嫡母由良御に預けて養育でらし物なる」け 都にろりし、保元の頃由民神りつける悩み都の住居頃りしょうりけ

ーノニナ

白馬山陵 議乃う一公裁らりてもくの如く器物と石郭中に納め蓋石と乃せ出 成法持寺の住僧取出一其り はかけい寺社官に言上て こい神評 垣組引 乃頂きの樹根バッと地く何みて大九らたたは土中に石郭×野され にあく天保八年八月十四日八大雨暴風に陵乃樹木と吹倒し北の山 きに暑園 かさるり知でうろう マー、、、我其御用して彼寺に至。一ついてに其器物とんなし、誠 と盛り樹木と植て舊貨に復うしめなり其項國志御改撰の電中 了其人的長持の形了て横四五尺豎二間餘深五六尺計りろう に数千年の古製奇、妙いから形ちるで何の料に用いきは品って 名所圖會の法持寺の条に載せ置けれと故らりて再いさ そ大きなく蓋石五枚して覆一り其内に種この器物的る -なり好事けんのたりに其びりょう 匹面石

勢田りて翳と不食事 日本武尊乃故事にらり 七當所の人まる一中

万て古来了り世にりてものま 心瑞鳥也後世に外記師尚合勘申白鳥例去此白鳥出来云云子の外

也に八粟田日記に天明丁未年以了所了外金葉和歌集に少将內侍が白鳥の歌不

瑞鳥珍禽の諸國了出たり

下瑞

まった事うや鶏の白きい神の島と称して数田人なりぬもち

をたちらい也且又尊神かられるを珍い神霊の去らせろり時白き鳥

とはまれるとろりつろかって其形の驚して何してたかうる

ちれい鳴いととうちちの類い何あっても白色からい食いもい

島郡黎田庄宮地花池村乃氏むう ちのろとういうは

小人自出

延喜治部省式の祥瑞のうちに白檀白島白雄白雀で中端と きは者多し又諸島の慶生して白もなばいしてくり祥瑞の物しい

白龍以

~いはらし きっせばかく白色からい何きを電馬ちり国に其

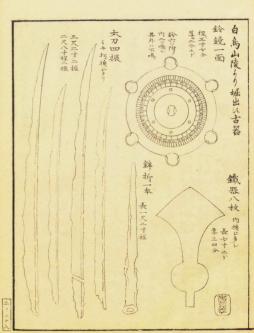
以うにもろ

そ好事れ人の一覧に

5

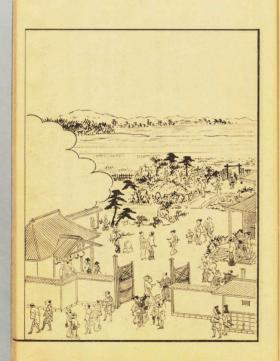
ノニナセ





殿下日毛羽 の子がに流 之門九月 との珍一もうれい翌年戊申の春ま 足折放北山軍 远世事 きばも白 白鸟 たる物なく - 上表なやかして 0 として、翌年六中の春で了」と京柳田様の実ちりを大雨と東上でしている。と物なり入り、ありれ、留き合に足らびと柳らは依原三位版で書の那也おり、端とものが一世の作用のたち一きりまれ、高と高しなりが目にりに珍りて一言の神神法もちりをれ、公卿でらびまっているの神神法もちりをれ、公卿でらびまっている。 八年足折きて程ちく花山天皇御行、と江戸人著述の書にあってり大 瑞鳥七 自者家持以り外霜乃置きの日勘とえられ一次と以上乃五種白雀の白湯日本に見を乃事いもご所見ちて、以中納言以上乃五種 这世事和三年王正月提州九條村白雄出同四月了分六月七三日献白雄 百飲抄に寬和元年 五月中一日信濃国所献之白雄候藏 聖朝を賀―奉り以此時九條尚實公摄政」とま、毛色乃島を献せしれたり公鄉百官皆、注瑞也 五近江国贡白 時日本書紀に 他の祥端い 白鷂享保二年校行の年代記二塩永六年八二二天武天皇四年春正月七辰東國黃白鷹 三らて沙人古端や表し一山変で示(いる) 株村白雄出同四月より六月に至り治なの寛和解村白雄出同四月より六月に至り治在月山口の湾園所献之白雄候蔵人新 政うてましゆい

萬出店都 用于支了火口馬 白鷹白大應等古書にええたれど諸島 月五日丁承狗養同産の響」而飲七白雲『慎の雲客御・賽の喪上之となってう外、大子演の機の大きの一年五月の一日の一般に文女、皇三年八月去面の機の大きの一番三日の一般に文女、皇三年八月去面の機目歌白霧・神・亀二年 正月の辰山背田織台雲の大きの一日の一般に文女、皇三年八月去面の機目歌白霧・神・亀二年 正月の辰山背田備前国献台雲を入り、東京内祭五朔庆中河の 白 城の日本書紀に持続大皇三年八月辛五昭下後教育城田 申 年八月祭五明に申 河の 白 城の日本書紀に持続大皇三年八月辛五昭下後教育城田 甲 年 八月癸五昭下後 藏主所養白色山から云云思老即幕府賞既只此事也李瓊日録に中 壬午伊勢国貢白茅鶏に天武天皇十年八月 朝丹波国献白錦とえて 東北に不產該魚而有百雁中州西土無百雁ととはちり 白東二月七日にちくらん故りの古書に所見たり大和本草に箱根山らり 欲慰顧情則令諸國得貢百為関十一月乙卯朔戊午越國貢百島四隻為 馬上天仰望之情一日勿息是以戴獲白鳥養之於陵域之池因以親其島 七器以了不又日本書紀仲哀天皇元年乃条に父王既崩之乃神灵化白 利の 白江 白 白山南高盛山山和蘇将軍家其色自而如雪其声不相似我国馬州南岳東統仁安治三年十月世五日馬津 置後左衛門財忠綱以石 建高 排沫面頁出馬車馬那名送台北 一日 茅屬 語日本 白山村高震山山柳献将軍家其色白而如雪其声不 慮熟日 東太郡言白 以本書紀に雄 即以使者乞得而献之と之份了一白山義持統天皇竟正五甲申十月九日万松野齊容白山義明本書紀 鸛為居于谷上濱因記置川瀬都器天皇十一年 夏五月辛 夾明 とようとううれらられ 本紀に具電子三年十





うくそん色の白うかでい愛むして池にも林らと飼置なに変也と 七月され、此地にある七人~、此天皇八御心と察一奉了一何鳥 とえなられいのはまして畿内のうちらりいろうすいたす とのは白鳥いいっちらもうと驚ちたといちろい北国まを尋れる というしはっくくう~~八七向一置つ博達の諸君子是と 一次

其山集 勢田うてるはもたつとしる名だ

幡屋乃名義 敏老に日本武尊御間重く成せ後て終に失給によ 白鳥 事飛後一時八長、一丈乃白幡二流きとえる」也尾張國に飛落以其所 を惡くの覚~りむ東國に飛这り尾張國松子島の安飛行りは白鳥に と成て南て指て飛移八三三紀伊國名草郡に暫く落留りける。此所 公八白島塚と名付たり幡の落了は處と八幡屋~そ今に有り云云と

というをはに振って彼二ちられた彼の落たりして、起りし地名

織女八居て絹織ちり一事八段ち 也と里老の古傳なりされとう綾錦なで織りより機家の跡ならべ ーと考へ定めて名所圖會を其かしをはし 置りっ實に尾張にとく

とららっても知は、一 とりいうのりては多とますしていればまるさいできるとは幸田基報を本集、他はちょうできるとはりかりと

悪七兵衛,完趾 草に南新宮半班天乃北に行茂りた以所と景清屋鋪と云又勢田り 花関随筆等にから國の最清と人者明の成祖と殺うしとして果 内うる最清屋鋪と云りの何きと證とされて難し云云ともはるり最 て字五と了所也まり是了南に大瀬古と云所でり今八人家也其 北十余町でかりに竹一七一有所と景清屋鋪と云是も勢田の境内に 俗説って今更拂ひ捨了了一相、園隨華及い青栗園隨華 誰 清勢田に居たりしとい事も頼朝柳と討人とでしとい事もつい 敷田地の~~らに景清屋鋪と、写人古跡三所り厚覧

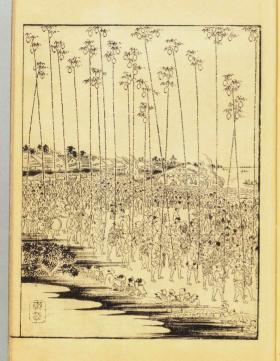
成祖故疑清及朝獨著緋命搜之得所藏及詰責清奮起口欲為故主報鄉 命仍其官一日早朝清衣緋衣懷及入先是占者奏異星赤色犯帝座甚急 清除金華知府再選御史大夫燕師入諸臣死者甚泉清獨詣闕自帰成祖 仇とうりく遂けば符合奇とよべしともは一明史百四十一に最 うん日本の景清い源の頼朝と教うんとは和漢の景清とした故主の 八子信八誠に不思議七月奇遇七月 耳成祖然磔死。とろはと引用して本しくうけり其名も所行とたっ

白魚 寄って放うせられー物今に至て生成にと云云春の末けく」白魚乃 動魚大字集墨云朝音白漢語抄魚薄身白色也とえててつうに物ちれ としと関東乃地にい産せらりしてや事跡合考し名事のか西國川と始 子と持きたと多く取り其体に乾 め江戸表乃白臭い神君の御差圖了て尾州名古屋浦の白臭と御耶 勢田の海ってと信他國にて、名古屋の名物~に和名類聚抄に して納り置冬に至り沙のう 引も

三、三十

鳙魚 其臭い事人アとやくがかー一古或人の子継母の語にらつり其父語と 多と秋冬乃間漢人~りて諸方に送は大和本草に鳙と焼け、油多く 与かったらは棒かり出の大きにちは也漸くに長して白魚の形と成た お職端と結い土砂に堰切て其中へ沙の差引もたやりに致し渡にと 奥でやきて身代とし其子とたずけて他所へ去らしむされるり 信一家僕に命一く其子と焼殺さしむ僕其罪ない事とろうれ、糖 は時其うころとくちろともはな らもりでして其白臭のかしたらを浸し置けべれのけると其子 此魚と子の代と名はけー・うしもは一日本釈名うと同してはにもは 勢田の前演のみなるとは遠く伊勢浦まって川、は落口なるに産い 芭蕉新文集 きて来とうとうとうはでつるうれ がけほのやーら気のとう一寸無前文集をかってき中に後のうへらて 其角

一人其盤に





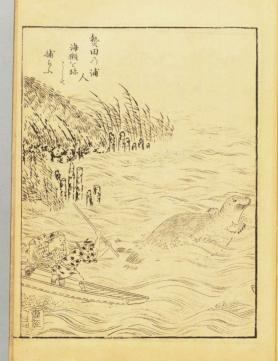
京鍋の宝八治に主螺泊るの代に古好 やろうい

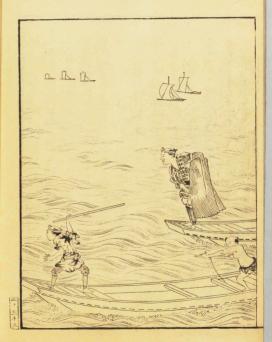
といる歌とろせたら きれとしい海の産いさる悪臭も少く風味 ひておやいせの海にするころしろれであかつかすりとけえも こう~が其上往古の田歌と、工物に此奥け水面に踊かさはとうた せ川におとうけて小松にろりや伊勢浦してくらむやや しいいとり 一村 き也されで尾張田歌と名はく

鎮田美女等随之替唱歌又壮士中被召出前銀藝之輩為事皆故尚と人不了、風流なり中了了 農人乃田了多、一了一个吾妻號に文治四年六月一日代大姐君柳方山降前載被 持けて入られてると田歌神歌神歌地歌とつとははけて古那ちる四歌ち、と持けて入られてると田歌、朝野な歌にろうな徳編云記に惟馬樂里島子 なーンべっち 尾張田歌ひて とう了ひーと後中尾義稿の説に身つ掠して後人に身で振めとしてと得知られていていますとと川、其所今定、ちくばみついすしと、は解している 此尾張田歌八其舞の唱歌の残りたは物ちろ 田歌女 らんやっきくい花や 小聖田舞無方案之小聖田宮朝推古所製之樂致ともちちり - ーシーは紙に書かたらーと四辻家に 登雷放紀事けうち因に云春基文集の

三八三十

辛螺榮螺 窓引鬼のきこうしなくりるともちしたいにうもといくいあし 乃所一うけ請待の主人八来り是とて各の名はけたはい間違ちら 物しやとり、又或情に是ときよくりとと物也ともてせんきまり 信濃に帰りて披露以事主是と見て鯛にちりばまし 濃の國了て或人主人と招請せんして尾張の教田一生鯛と調一に遣い 富士山上の池ろこの やくいいけらう一きはるられとけたは造り出し也といつ ソフで使の者とうべいとうは施丁人へ是とれにいき、よしとは 鯛と見かりもしてしてくいれ、定めて遠國の者なんしいてた きいうとくとらてくりいりきなれい奥屋是ときてこれ程多き 一なけい此使の者朝と知らうりなれい勢田りなや町に至り高声うて 自中 かさらかと思い朝と名付ていううと大きなはっているは此者 1の池のこの→ らい海産の鞠と形の同ト けれど別東のり一駿河人いり空上上十餘里得平 慶可以息定有池馬周也数里中多製 乗とんくした 勢田の名産とにきのかいかけ物語に中じう 八事うて信 けれど別臭へ いいとよ物也と 二三





百年以前らられるわちの事と知らにたれる 黒く長し毛色いう以赤く黒青し三河の伊良古帯の過にある。あと ろり其先に成らり水うなどりく関ううれい先細くして黒く尾乃 家八郎こくととなる事保二十年四月五日勢田浦乃邊傳馬新田子て雅師と 多く接りの此数田前の怒浪しい日き僻海と 怒浪七十 如一前足八鰭乃如く首の骨八馬の如く耳少く目甚大な一髭、薄 備一奉の或八下殿の者買してえて物に出し 保の頃もり此と、此歌と西三度も生補り高貴乃神方は御上覧」と 先生の春のなるめにもはてりさってすると常うはえの異戦ちの天 いけて此数の多く住りに島をられいならしっとな物ななられる山 しりちにつらうて海瀬と打殺に長一四尺程後脚猿の足の如く黒き 数田の海及い智多郡の過うてたまるに捕は事がらかり - 其形状全く君山先生の 前の如き平穏静から海に来る事、布りて赤らしられた海や好む歌るそ紀伊国海部郡白帯八沖なりた冬春乃 説にたり事ちく大小八種いり いとはのでうりる

長五六尺或八一丈もうりに及べゆもちり海瀬海中らて立て八半身八 そうち おお留人と才怪物補進らて近らり来り一時火焰と見當に六 たちっされても武士さら者の憶してやいちはいきして間氏鉄砲と マイ彼黒雲に乗りたりとえ、雲間に火焰ひ~ めに山海と 羅利女堂に立寄り雨と避居たり叔此海中了何の界天ナなりれ 所に遊獵るへに海上俄に黒雲起り暴雨頻りに降出しの八側なる十 佐伯矣乃藩士問氏其同僚一西華と共に城下近に海岸雲止山とい 邊乃浦人いてり想山著聞奇集で無永三年版的以に天保五年九月豊後國 捕り或い海邊八陸地に上りて睡即居をおとうち殺す事ろりと其 水上に頭するは其身柔ったしく田放きは事自由なり機能の網あて生 女王は火蓋と切て放しなれい忽ち火焰消散し黒雲うすらに海面穏 こと静き了以其後四五日過ぎ同國北浦と云所の沖に、中大きたな て真一文字によちとうはうして寄り来は其れをろしていてんる

これと改 海戦 陸 て打技 性らの事、此尾張邊うてい夢っと知らい事にていむく もはち鈴園にいいは大戦もろうてもっと昇天さくする 甚美なる く國老とし に相違す 3 乾 19 H む長七間 車三輛 其王 七漂ひ居 そもは一置の人 允藩士中 と其皮して泥障十八懸造り莫太比利を得す 則 七奥に 間氏 三尺横中 3 すり 1, に下きんを扱切割なられ、膏甚多く 止有有 て城下 今ち贈で族氏し 3 九尺計 八代官所 れ、先日雲山山るてお留 到来り城主後一部 老海瀬 一届け猟師 い食しるか して左け 目 けな 玩与 2 肉彩 程 其 鉄 故 け来 中来 怪戦 後 验

302893

A294 1A-3-2

三ノ三十七万

